



序

その他のタイトル	Vorwort
著者	藤井 啓行
雑誌名	独逸文学
巻	35
ページ	1-2
発行年	1991-05-02
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018287

序

いよいよこの3月末日をもって、敬愛する山下肇先生が、本学の規程による定年で退職されることになりました。関西大学独逸文学会はこの「古稀記念号」を刊行して先生に献呈し、我が学会の更なる隆昌を相共に祈念する次第です。歳月の経過はまことに早いもので、十年一日の如しというのが、今の私にとって文字どおりの実感であります。

思い返せば、本当につい昨日のここのようにも感じられてなりません。東京大学を60歳の定年でご退官になる少し前の先生に、私が初めて本学への赴任のご意向を打診し、最初は非常勤講師として集中講義をお願いしたのち、教授にご就任いただいたのが昭和56年の春のことでした。ですから、数えてみると、実際あれからもう10年にもなるのです。その間に私たちも同じ年数の歳を加えました。もっとも、ここでこんなことを今更めて繰り返し述べるのも、自分がそれだけ歳をとったせいかも知れません。

とはいえ、その10年の間にも無論、私たちの学科には様々な事柄が実は相次いであったのです。その中で何よりもまず、同僚教授の内、まだ50歳代前半の若さで和田賀一郎・新谷浩堆の両君を次々と病魔のため亡くしたのは、かえすがえすも口惜しいことでありました。これは、その間の必ずしも順風満帆とは言い得ない学科運営にとってはなおさら、まことに堪え難い不幸であったと申せます。そんな中で山下教授の存在は、一つの大きな救いだったと思います。先生にはご着任ののち程なく我が学会の会長職に、前任の現名誉教授見次直雄先生の後をうけてお就き願ったのですが、山下先生はその後今日に至るまで引き続きその職にあり、よく重責を全うして下さいました。ただこれとは別に、遠大な学科改革の計画も当初お持ちのようにお見受けした先生のご期待に、或いは私どもがついに副い得なかったのではないかという気持ちが私には常にあり、申し訳なく思っております。

山下教授は、近代文学に関する数多くの際立った業績によって学内・外に広く知られ、まことに博学多識で、文芸の殿堂に悠々として遊ぶエピキュリアンの風貌も具えておいでです。その許多のお仕事の中でもユダヤ学

は特に記念碑的なものであり、またゲーテの『ファウスト』完訳の上梓も目前に迫って、慶賀の至りです。さらに先生はまたエッセイの達人にして、能筆家としても著名で、世事万般に対する関心の幅が広く、まさしく多趣味のかたでもあります。我が独逸文学会の活動の活発にしてしかもよく融通無碍であるのも、また宜なるかなと申せましょう。先生はさらに学生に対する教育の面においても、日頃きびしいうちにも、しばしば真情を吐露して親しく指導されるので、彼らが受ける影響には並々ならぬものがあつたと思われまふ。

いま山下先生が専任の職から退かれるに当たり、当ドイツ文学科の全教員にとって、わけても、長年にわたり公私ともに格別の親しいおつきあいを願って来た私には、何か言い難い淋しさが募ってまいります。しかし先生には、来年度も講師として本学大学院に引き続きご出講いただくことになっていきますので、その点はまことに喜ばしい限りであります。

どうか山下先生にはくれぐれもご自愛なさいまして、私どもを今後も末永くお導き下さいますよう、心からお願い申し上げます。

平成3年3月

藤 井 啓 行